

【第22回】 『歎異抄』後序のこころ②

～ ただ念仏のみぞまこと ～

【本文】

まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして、われもひとも、よしあしといふことをのみ申しあへり。聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御こころに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。

【現代語訳】

本当にわたしどもは、如来のご恩がどれほど尊いものかを問うこともなく、いつもお互いに善いとか悪いとか、そればかりをいいあっております。親鸞聖人は、なにが善でなにが悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思いになるほどに善を知り尽くしたのであれば、善を知ったといえるであろうし、また如来が悪とお思いになるほどに悪を知り尽くしたのであれば、悪を知ったといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫であり。この世は燃えさかる家のようにたちまちに移り変わる世界であって、すべてはむなししくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中にあって、ただ念仏だけが真実なのである」と仰せになりました。

【解説】

親鸞聖人からうけたまわった二つの法語を記して、聖人の深い宗教的信境を顕すことによって、この書の画竜点睛がおこなわれます。その一つは「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」というご述懐であり、もう一つは、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。…《中略》… 煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」という仰せでした。

こうして最後に、この書をあらわさずにはおれなかった著者の深い歎異の想いをつづつて巻を閉じていくわけです。

(梯 實圓『歎異抄 現代語 解説付き』・「解説」170頁)

■不毛の論争

まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして、われもひとも、よしあしといふことをのみ申しあへり。…

⇒「如来の御恩」＝法の沙汰（他力・如来の救いのはたらき）

⇒「よしあしということをものみ申しあへり」＝機の沙汰（自力のとらわれ）

浄土真宗は「他力」の教えといわれます。しかしその「他力」の教えを、自分に都合の良いように聞いてしまうのが異義者たちのすがたでした。「他力」の教えでありながら、自分たちの「とらわれ」や「はからい」をまじえて聞くことによって、如来を見失った人間の善・悪にとらわれた不毛な争いが起こってくるのです。

■「総じてもって存知せず」

聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。…

※『歎異抄』第2条（『註釈版』・832頁）

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。

⇒生死を超えていく道は人間の認識能力（分別知）ではかり知ることにはできない。

⇒生死を超えていく道は仏智（無分別智）の領域をつげる本願のみことばを、

「よきひとの仰せ」を通して聞きひらくより他に信知するすべはない。

▼凡夫の現実のすがた

後序で語られている「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」という言葉は、人間の行いの善し悪しの価値判断について、自己中心的な想念に支配されている為に真実の善悪を知り通すことのできない者が、物知りぶって行う判断の曖昧さを指摘された言葉でした。

①善悪の基準が時代によって、場所によって、あるいは文化の違いによって、更には判断する人によって変わっていくとすれば、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」といわざるをえないのではないのでしょうか。

②もっと根源的にいえば、私たちの日常生活は意識する、しないに関わらず、常に自己中心的な物事の考え方から、自分に都合のいいものを「善」・「是」とし、自分に都合の悪いものを「悪」・「非」とみなして、愛憎の世界を描き出して生活しています。それが「凡夫」の偽らざる現実のすがたではないでしょうか。

※『一念多念文意』（『註釈版』・693頁）

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたどへにあらはれたり。

※普賢 保之「滯標」（京都女子大学 宗教部「分陀利華」・第373号所収）

私たちのありのままの姿とはどのような姿であろうか。親鸞聖人の作られた和讃には「悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり」とある。もって生まれた悪をなす性質は決して止めることはできないし、私たちは毒蛇や蝎のような煩惱という毒をもっている、と示されている。このような見方を後ろ向きと言う人もいる。はたしてそうであろうか。あるものをないこととして現実から目をそらすことこそ後ろ向きであろう。

※『憲法十七条』第10条（『註釈版』・1436頁）

忿を絶ち瞋を棄てて、人の違ふを怒らざれ。人みな心あり、心おのおの執ることあり。かれ是んずればすなはちわれは非んず、われ是みすればすなはちかれは非んず、われかならず聖なるにあらず、かれかならず愚かなるにあらず、**ともにこれ凡夫ならくのみ**。是く非しきの理、たれかよく定むべき。あひともに賢く愚かなること、鑲の端なきがごとし。

▼如来の「まこと」と凡夫の「いつわり」

如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。…

「善」＝自他ともに安らかな幸せをもたらすような行為（安穩の業・善因楽果）

「悪」＝自他ともに苦しみをもたらすような行為（非安穩の業・悪因苦果）

※『教行証文類』「正信偈」（『註釈版』・206頁）

道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。万善の自力、勤修を貶す。円満の徳号、専称を勧む。三不三信の誨、慇懃にして、像末法滅同じく悲引す。**一生悪を造れども、弘誓に値ひぬれば、安養界に至りて妙果を証せしむといへり**。

⇒大悲の必然としての救い。

⇒衆生の苦しみ・痛みこそが如来の救いの対象。そこに善悪賢愚の区別はない。

※善導大師『観経四帖疏』「玄義分」(『註釈版〈七祖篇〉』・312頁)

しかるに諸仏の大悲は苦あるひとにおいてす、心ひとへに常没の衆生を愍念したまふ。ここをもつて勧めて浄土に帰せしむ。また水に溺れたる人のごときは、すみやかにすべからくひとへに救ふべし、岸上のひと、なんぞ済ふを用ゐるをなさん。

⇒いま痛んでいる人、苦しみの中にいる人に対する万人平等の救いこそが、阿弥陀如来の救い。

すべてを知り通された如来だけがなしうる「まこと」の判断と、煩惱具足の凡夫がなす「いつわり」の判断とが対比されています。如来のまことは「南無(まかせよ)阿弥陀仏(われに)」のみ名となって、私たちのもとへといたり届き、「まことあることなき」わが身のあり方を照らし出し、そのままに摂め取ってくださいます。まさに真実(まこと)と名のつくものなど、何一つ持ち得ない私の元へ届けられていたものこそ、「南無阿弥陀仏」という如来の喚び声となって届けられた念仏だったのです。そのことを聖人は、「ただ念仏のみぞまこと」と仰っていかれたのでした。

※『上宮聖徳法王帝説』(『日本思想体系』2・371頁)

我が大王の告りたまへらく、世間は虚り仮りにして、唯仏のみこれ真ぞ。

⇒日本最古の刺繍遺品(飛鳥時代)である「天寿国繡帳」のなかで、聖徳太子が生前、妃の橘大娘女に語っておられたといわれる言葉(銘文の全文は最古の聖徳太子伝である『上宮聖徳法王帝説』に記)。

⇒世俗の世に生きながら真実の道である仏道を歩まれた二人は、ともに同じ領域を確認されていたのです。

※梯 實圓『聖典セミナー 歎異抄』(343~344頁)

是非を争い、愛憎に迷い続けるものにも如来招喚のみことばがひびき入る時、愛憎を超えた究極の依りどころを信知せしめられ、生死の苦の寂滅する安らかな涅槃の世界のあることに気づかされていきます。…《中略》…如来にあうことのない人生は空しく過ぎてしまいましたが、真実のみことばにつつまれた人生は豊かに充実していきます。行方の見定められない人生は恐怖にみちていますが、「いのち」の方向を浄土と定められた人生には深い安らぎがあります。

こうした本願の念仏は、そらごとたわごとの人生に豊かな実りをあらしめ、うその人生をほんものに変えていきます。そのことを、聖人は「ただ念仏のみぞまことにておはします」といわれたのでした。

【本文】

まことに、われもひとそらごとをのみ申しあひ候ふなかに、ひとついたましきことの候ふなり。そのゆゑは、念仏申すについて、信心の趣をもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとの口をふさぎ、相論をたたんがために、まつたく仰せにてなきことをも仰せとのみ申すこと、あさましく歎き存じ候ふなり。このむねをよくよくおもひとき、こころえらるべきことに候ふ。これさらにわたくしのことばにあらずといへども、経釈の往く路もしらず、法文の浅深をこころえわけたることも候はねば、さだめてをかしきことにてこそ候はめども、古親鸞の仰せごと候ひし趣、百分が一つ、かたはしばかりをもおもひいでまゐらせて、書きつけ候ふなり。かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生れずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくななく筆を染めてこれをするす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。

【現代語訳】

本当に、わたしも他の人もみなむなしきことばかりをいいあってありますが、とりわけ心の痛むことが一つあります。それは、念仏することについて、お互いに信心のあり方を論じあい、また他の人に説き聞かせるとき、相手にものをいわせず、議論をやめさせるために、親鸞聖人がまったく仰せになっていないことまで聖人の仰せであるといい張ることです。まことに情けなく、やりきれない思いです。これまで述べてきたことを十分にわきまえ、心得ていただきたいことと思います。

これらは決してわたし一人の勝手な言葉ではありませんが、経典や祖師方の書かれたものに説かれた道理も知らず、仏の教えの深い意味を十分に心得ているわけでもありませんから、きっとおかしいものになっていることでしょう。けれども今は亡き親鸞聖人が仰せになっておられたことの百分の一ほど、ほんのわずかばかりを思い出して、ここに書き記したのです。それにしても悲しいことです。幸いにも念仏する身となりながら、ただちに真実の浄土へ往生しないで、方便の浄土にとどまるのは、何と悲しいことでしょう。同じ念仏の行者の中で、信心の異なることがないように、涙にurenながら筆をとり、これを書いたのです。「歎異抄」と名づけておきます。

同じ教えを受けた人以外には見せないでください。

■歎異の述懐

かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生れずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくななく筆を染めてこれをするす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。

▼自力の念仏者への歎異

※『教行証文類』『化身土文類』（『註釈版』・412頁）

悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雑し、定散心雑するがゆゑに、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しがたく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし。おほよそ大小聖人、一切善人、

本願の嘉号をもつておのれが善根とするがゆゑに、信を生ずることあたはず、仏智を了ら
ず。かの因を建立せることを了知することあたはざるゆゑに、報土に入ることなきなり。

⇒本来、阿弥陀仏の救いの力・はたらきそのものの活動である念仏を、自力の善根に
してしまふ自力念仏への戒め。

⇒自力の念仏者は真実の浄土（報土）へ往生することができないことを示される。

▼唯円房の想い

※『歎異抄』・序分（『註釈版』・831頁）

先師（親鸞）の口伝の真信に異なることを歎き、…《中略》…故親鸞聖人の御物語の趣、
耳の底に留むるところいささかこれをしるす。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがため
なりと

⇒『歎異抄』の序分にも、同様の趣旨が述べられている。

⇒唯円房は師である親鸞聖人から聞き伝えられた感動的な二つの法語を記した後、自
身の歎異の想いを述べられています。これからほとんどの直弟子たちが往生をとげ
るにつれ、いっそう人を惑わし、自分も惑って仏祖の真意をゆがめる者が増えてく
ることが予測されるが、本願念仏に志のある人々の、聞法の道しるべとなるように
と念じながら、涙を流しながら筆をとられたのが、この『歎異抄』だったのです。